

日光を訪れた外国知識人たち
—東照宮という異文化体験の場で—

井戸 桂子

Western Intellectuals Midst the Holy Mountains of Nikko
—Encounters with a Different Culture—

IDO Keiko

Since the beginning of the Meiji era, visitors from Europe and the United States have repeatedly referred to the proverbial Japanese phrase “Who has not seen Nikko must not use the word *kekko* (splendid).”

By examining the texts written in reference to the Toshogu Shrine in Nikko by, to name a few, the intellectuals Emile Guimet, Edward Morse, Isabella Bird, Pierre Loti, and Henry Adams who accompanied John La Farge, this paper proposes to reveal what each voyager meant to express when they used the word ‘splendid’.

The journey to Nikko, even in the early years of the Meiji period, was an exciting highlight for all visitors including the aforementioned international scholars. Nikko was a sacred place easily accessed by convenient pleasant transportation and it also afforded comfortable accommodation. There they visited the Toshogu Shrine, a singular example of Japanese religious architecture, dedicated to Ieyasu, the founder of the Tokugawa Shogunate, and one adorned and laden with Japanese art and one where unique indigenous craftsmanship was displayed. It was a great and unique encounter with this different culture for foreign worshippers. I endeavour to analyse their responses to the Shrine within this paper.

At first sight, all of the scholars were surprised and impressed with the scale of the Shrine as well as the decorative work and afterwards often expressed their reactions to it with the word ‘splendid’, even Loti wrote “une beauté trop écrasante”.

At the same time although, it was noted that the work did not conform to all the rules of Western art, so textual evidence provides clear insights into the divided opinions of these international visitors as to the Shrine’s worth and also thus to related Japanese art forms. In other words, here were formed likes and dislikes and reflected the acceptance or nonacceptance of Japanese culture by each individual.

While Morse and Bird affirmed the Shrine’s buildings extraordinary grace and became ‘one prisoner by their beauty’, Loti denied it and said that the work was done by aliens coming from another planet. The differences among their responses to the Shrine could be taken as a clear assessment of each individual’s relative capacity in understanding Japanese culture or as biased or unbiased view points when appreciating an unfamiliar ethnic group.

I will also verify that the Toshogu Shrine particularly attracted the Americans by its prosperous power, while instead Bruno Taut, a German architect, was more deeply moved by the Katsurariyū

Palace's declining beauty.

Adams, a historian, was greatly impressed by the scale of construction representative of Tokugawa's rising energy, as he himself belonged to the leading elite power which was presently constructing the new country, the United States. La Farge, the notable decorative artist, found not only value in the beautiful craftwork enshrined at Toshogu, but also its transience.

On the other hand, Bruno Taut did not appreciate the Toshogu Shrine, regarding it as 'Kitsch' (fake). This architect who came to Japan as an exile preferred the noble and traditional architecture of the Katsurariykyu Palace for its harmony with nature rather than the newer Toshogu Shrine which symbolized the overwhelming energy of the rising power of the Shogunate. This leads one to conclude that the visitors from the newly emerging nation of America were familiar with Toshogu's energetic power and political purpose.

In these ways, the Toshogu Shrine offered and offers to foreign visitors various opportunities to encounter Japanese culture and a specific opportunity to reveal personal perceptual characteristics as seen in their reactions and reflections.

目次

はじめに

第一章 明治初期の西洋からの訪問者

- (一) サトウのガイドブック (明治八年、明治十四年、十七年の発行)
- (二) フランス人、ギメ (明治九年の来日)
- (三) アメリカ人、モース (明治十年の来日)
- (四) イギリス女性、バード (明治十一年の来日)
- (五) フランスの作家ピエール・ロチ (明治十八年の来日)

第二章 アメリカ東部エリートたちの東照宮

- (一) アダムズとラファージの来日の経緯と日光への避難
- (二) アダムズと東照宮
- (三) ラファージと東照宮
- (四) ブルーノ・タウトと比べて

おわりに

注

はじめに

「日光を見ずして結構というなかれ」

この言葉は、日光東照宮にまさる結構なものはないと、その見事さをたたえたものである。この諺にも似た言い回しが、He who has not seen Nikko must not use the word *kekko* (splendid) という英文で、あるいは、Qui n'a pas vu Nikko, n'a pas le droit d'employer le mot : splendide というフランス語文で、明治初期から日本を訪れた西洋人の間で、何度も語られ、また書き残されている。

パークス英国公使夫妻が明治三年(1870)に西洋人として初めてこの霊山を訪れるのを許可されて以来、日光はかれらの格好の観光スポットとなった。もちろん、いわゆる不平等条約の改正(実施は明治三十二年)まで、外国人の内地旅行には旅行免状が必要であったし、東照宮参拝にはその許可が必須であった。しかし、

宗教あるいは建築の研究といった名目のほかに、本音は仕事の後の気晴らしにという理由もあって、旅行者はこれらを入手して、次々と日光を訪れた。そして、「結構」と言ってみるのであった。

この小論では、欧米人旅行者たちの、この「結構」と言う表現に耳を傾ける。そして東照宮という宗教建築に向きあったとき、同じ対象でも彼らの評価に違いがあることに注目して、欧米人の中で異文化体験の微妙な差異があることを明らかにする。

まず第一章では、明治初期に日光を訪れた欧米知識人たちの言説を年代順に数例拾い、日光見学のための交通手段や宿泊施設がいかに整ってきたか、その過程を明らかにしたい。同時に、東照宮に対する彼らの批判と称賛の交じり合った心情のなかから、異文化に対する反応の違いを汲み取りたい。第二章では特に、明治十九年(1886)に来日した二人のアメリカの知的エリート、すなわち、思想家ヘンリー・アダムズと画家ジョン・ラファージを扱う。ドイツ人建築家のブルーノ・タウトの有名な日記中の評価と比すると、二人のアメリカ人の判断にどのような特徴が浮かび上がるか、考えてゆきたい。

第一章 明治初期の西洋からの訪問者

(一) サトウのガイドブック (明治八年、明治十四年、十七年の発行)

日本が開国した十九世紀の半ばは、世界が交通革命に入り、世界漫遊家(グローブ・トロター)と呼ばれる人々が出現した時代である。同時にドイツの青表紙のベデガー、あるいはイギリスの赤表紙のマレーが、旅行案内書として、欧米の家庭の書棚に憧れを持って並べられた。

日本について書かれたもっと早い案内書の一つは、元領事館勤務のイギリス人、デニス著の『中国・日本の開港地』(1867年)である。日本だけを対象としたものでは、旅行が制限されていることから、やはり、都市案内から出版され始めた。まず、京都案内(1873年)、横浜案内(1874年)であった。⁽¹⁾そして、これら二つの都市に続いたのが、何と、日光であった。それは、幕末明治のイギリス人外交官・日本研究家、アーネスト・サトウ(Ernest Satow, 1843-1929)が明治八年(1875)に出版した『日光への案内書』(*A Guide-book to Nikko*)である。

サトウはつづいて、元イギリス海兵隊士官のホーズ(Hawes)との共著で、『日本中部・北部旅行案内』(*A Handbook for Travellers in Central and Northern Japan*)を、明治十四年(1881)に、横浜のケリー社から出版する。この書は欧米人による日本地誌研究の金字塔とも言われ、日本アジア協会会員の尽力に負うところもあった。サトウは先に触れたマレー社のガイドブックを念頭においてこの案内書を編んだのだが、すぐに売り切れになったので、序論すなわち日本に関する説明の項を増やして、三年後に(1884年)、第二版の原稿を執筆する。するとこの版は、マレー社の要請で当社の赤い表紙のガイドブック・シリーズに加わることとなった。これはとても稀な例で、マレー社が早急に良質な日本案内書を出版したがっていた状況が窺いしれる。(その結果、今日では、ケリー社版をマレー第一版として扱っている。) ロンドンで千部印刷されたこの案内書を携えて、多くの欧米人が、例えば第二章に登場するヘンリー・アダムズたちが、横浜港に上陸した。

さて、この待望の案内書(国会図書館、横浜開港資料館所蔵)を実際にひもとくと、日光に関して二十ページ余りを割いている。東京からの往路も複数載っている。当地の旅館事情に始まって、その歴史、東照宮をはじめとする寺社の詳しい説明、周辺の山や湖、滝への遠出の誘いまで紹介されている。ちなみに旅館としては「鈴木ホテル」が、ストーブ、食事などで外国人向けの用意を整えているので、特にお薦めとなっている。「金谷」は食事を自分で作りたい人に向いていると記されており、コックを連れて旅行をするという当時の外国人の旅の習慣をあらわしている。また、夏季のお寺の僧坊の貸し家案内もある。明治の十年代に入って、外国人の逗留が頻繁になると同時に長期化してきたことを示している。

次に、欧米の知識人で、日光を訪問し記録を残した人々から四例を挙げよう。

(二) フランス人、ギメ (明治九年の来日)

明治九年(1876)に、フランスの実業家エミール・ギメ (Emile Guimet, 1836-1918) が画家フェリックス・レガメと共に宗教事情視察の目的で来日した。その名目を果たすためにも、来日して二週間後の九月十日、日光へ旅立った。新政府になって九年とはいえ、「念には念を入れるつもり」⁽²⁾で領事館の書記官に同行を頼み、その他、通訳とフランス風の食事を作る日本人コックまで雇って、人力車七台をつらねて出発した。一行は、宇都宮経由で二泊三日の道のりでたどり着き、三日間滞在した。(参考までに述べると、江戸時代、將軍をはじめ日光参内は三泊四日が普通で、急ぎの場合のみ二泊三日であったといわれる。)

その著書『東京日光散策』(*Promenades Japonaises Tokio-Nikko*, Paris, 1880)から、ギメの感想を拾ってみよう。

まず東照宮の建築についてである。ギメは鳥居をくぐり、山を登りながら、庭園・建築・大樹林へと入り込む構成を、「積み重ねられた美のクレッシェンド」⁽³⁾と評価して、「見事な自然と日本の芸術家の傑作との巧妙な組み合わせを通過する」⁽³⁾と、表現する。一番高所に位置する家康の墓から振り返って、「足の下は、金色の屋根の大海のようである」⁽⁴⁾と、緑の岬と金色の海の輝きに、つまり、自然の中の東照宮の絢爛さに、感動する。

また、人を神として祀ることに關しても、それほど抵抗なく語る。まず、ローマ時代、皇帝の死後に神殿が建てられたことに言及する。それを踏まえた上で、次に、日本では「主権者であれば一そして死者となれば一」⁽⁵⁾同様の敬意が得られたし、「帝は生まれながらにして神であった」⁽⁶⁾と、徳川と現在(明治時代)の事実として、淡々と述べる。

もちろん、ギメが家康を崇拜することはない。ただ、自分がこの聖地にあつては、異分子であると感じている。「外国の未開人が神聖な部屋を踏みこむ」⁽⁶⁾という表現からも明らかなように、この東照宮という霊廟にあつては、自分たちが「不信心者」⁽⁶⁾であることを自覚する。キリスト教信者の自分たちが、異国の異文化にあつては、「未開人」「不信心者」となることを、ごく自然に理解している。

すなわちギメは、自分にとって良く知らないものも、逆さの視点から、それなりに認めようとする。それは例えば、次の二例にも出ている。一つは、音である。満願寺(現・輪王寺)の副住職の近藤さんが催してくれた特別の読経の声を、「魂のコンサート、人間を超えた世界からきたハーモニー」⁽⁷⁾と認めることができ、たとえ、「和声を書きとめることができない(…)どんな不協和音」⁽⁷⁾であったとしても、「決して耳障りではない」⁽⁷⁾のである。いやむしろ、「強い印象」⁽⁷⁾を受け「感動」⁽⁷⁾している。もう一つは、民間信仰をうらやんでさえいることである。天狗の話を例に挙げて、「神々にこうして守られて生活している人々は何と幸せなのだろう」⁽⁸⁾と感想を述べる。決して自分で天狗を信じているわけではないが、絶対主の神以外の神への信仰の存在を、肯定している。自分と違うからといって否定はしないのである。ここに、ギメの相対的な見方を確かに発見することが出来る。

ところで帰京後、ギメは東海道を下り関西へと進みながら、宗教調査の資料という名目で、三百以上の宗教画、六百の神像を収集していく。それに先立って、日光のような一山全体が聖地となる地を訪れたことは、彼のその後のコレクションの進展を考えても、有意義であったのではないか。人は対象を肯定してこそ鑑識眼も深まるのだから。彼が船に満載した収集品は、今日、パリのギメ博物館の核となっている。

最後に、ギメの手記からうかがえる、当時の日光の状況を二つ指摘しておきたい。

一つは、教部省によるフランス語と英語の二種類の立て札が掲示されていたことである。いずれも、「馬、乗り物で境内に入るべからず。境内で鳥、魚を捕るべからず。」という内容である。こうした欧文の注意書きは、日光参拝の外国人の存在を明確に示している。

もう一つは、日光への外国人訪問者が自分の後が続くとギメが自覚していたことである。ギメは境内で今の立て札を見る直前に、一羽のつばめが金の鈴のついた円柱をかすめ飛んだのを目撃して、「あの優美な鳥は、旅行好きのイギリス女性になって、またやって来る」⁽⁹⁾と述べる。その女性とは、その頃マレー社から次々旅行記を発表していた、イザベラ・バード Isabella Bird を指す。実際二年も経たぬうちに、「オペラグラス

を首から下げて、いま日光で見られる仏教についての色々なことに驚く」⁽⁹⁾ことになる。こうして明治九年、欧米人自ら、日光がこれから外国人向けの観光スポットになることに気づき、実際、現実となっていったのである。

(三) アメリカ人、モース(明治十年の来日)

ギメとレガメが宗教調査をした翌年、明治十年(1877)には、アメリカからエドワード・モース(Edward Morse, 1838-1925)が腕足類調査のために来日した。モースは大森貝塚の発見者だけではなく、千八百八十年代の米国ニューイングランドに日本ブームを引き起こした張本人となる人物である。すなわち、フェノロサを呼び、ビゲローを同道し、合計三度も来日した、日本通の先達である。

このモースが到着早々初めて体験した日本の「田舎」⁽¹⁰⁾は、やはり日光であった。滞日中の克明な日記と彼の希有な才能を発揮するスケッチをもとにしてまとめられた『日本その日その日』(*Japan, Day by Day*, Boston, 1917)を開いてみよう。

モース初来日の明治十年は、ちょうど東京から宇都宮まで馬車が開通したところで、彼もこれを利用する。馬車は、十名ぐらいのお客と郵便物を乗せ、途中、馬を変えながら奥州街道を疾走した。⁽¹¹⁾そのおかげで、宇都宮だけで一泊して、後は日光まで人力車で運ばれるという、一泊二日の行程に短縮された。

モースの日本で初めての大旅行、日光行の文章には、当時の外国人の旅の様子を窺わせる記述がある。たとえば、一般の旅館は外国人の投宿を敬遠していたことである。というのは、外国人は部屋を一人ずつ、つまり個室を希望するので、宿屋を占有してしまうし、テーブルや椅子を畳の上に持ち込んで部屋を傷つけるし、連れて歩くコックは宿屋の台所で場所を取って支度するし…といった具合だったからである。しかし、逆に言えば、外国人の旅行がそれだけ、つまり旅館に「日本人の方を歓迎する」⁽¹²⁾と言わしめるほど、増えてきた証拠ではないか。そして私たち注目の行き先は、モースの言葉を借りれば、すでに、「世界的に有名な日光の諸寺院」⁽¹³⁾と紹介される。

モースは東照宮について、「実に驚嘆すべき」⁽¹⁴⁾であるとみなす。まず、その外部に驚く。概観の大きさ、建物の広さ、信じられない労力を要した石段に、驚嘆する。つづいて、「諸寺院の内部が外部同様感銘的である」⁽¹⁵⁾と言う。そこで、モース得意の細部のスケッチを若干試みたり、彫刻についても言葉で説明する。しかし、あまりにも驚きが深いので、スケッチも文章も、記し続けるのを諦めてしまう。「その精巧さ、大規模なこと、壮麗さの、一端を伝えることもできない」⁽¹⁶⁾と白状する。結局、この筆達者の観察者は、「日本の芸術と細工との驚くべき示顕を、おぼろげながらも描写しようとする企てを、絶望をもって放棄した」⁽¹⁶⁾モースは二時間の見学に圧倒され、「立ちすくんでしまう」⁽¹⁷⁾のであった。

ここで指摘したいのは、モースのこの「立ちすくみ」が、彼をその後の日本びいきへと導いたのではないかと推測できることである。

モースは来日した欧米人の中でも親日家といわれる。彼の日本に対する好意を示すものとして、『日本の家とその周辺』序文の文章(「他の民族を研究する場合、色眼鏡をかけずに客観的に見るのが理想である。しかし、もしそれが不可能ならば、偏見のすすで汚れた眼鏡をかけるよりは、ばら色の眼鏡をかける方がまだましである」)が、良く引き合いに出される。このような好意的な見方にいたった背景には、モースの魅力的な人柄から在日中不愉快な思いをすることがなかったことや、好奇心あふれる科学者魂が偏見を取り除いたことなどが考えられよう。しかし、来日十日で経験した、日本の文化を前にしての「立ちすくみ」が、強烈な衝撃となったことも確かである。何しろ、自分得意のスケッチという技を、「絶望をもって放棄した」のであるから。彼によれば、「外国人は日本人にすべてを教えるつもりで来た」⁽¹⁸⁾が、「その一端をも伝えることができない」ほどの「壮麗さと精巧さ」を、来日直後の日光で、発見したのであるから。

モースはその後、江ノ島で腕足類を研究し、関西に美術品の涉獵に行き、九州までも足を伸ばすのだが、各所で西洋と日本を比べ、日本に軍配をあげる。彼の日本への心酔は、日光での「立ちすくみ」にその始まりがある、といってもよいだろう。

(四) イギリス女性バード(明治十一年の来日)

明治十一年(1878)の六月の中旬、ギメの二年前の予告通り、「旅行好きの優美なつばめが」東照宮に舞い降りた。イギリス人女性、イザベラ・バード(Isabella Bird, 1831-1904)である。バードは、脊椎の持病克服のために世界旅行に出かけるという、好奇心旺盛でファイトあふれる、グローブ・トロターである。

この四十七歳の女性旅行家は、日本人の十八歳の男性一人を案内人に、東北の各地と北海道までの大行程を、夏の三ヶ月をかけて踏破した。その体験を、母国の妹に宛てた手紙という形で発表した旅行記が、『日本奥地紀行』(*Unbeaten Tracks in Japan*, London, 1880)である。この書は、一ヶ月のあいだに三版を重ねるほど評判を呼び、五年後には普及版も刊行された。

冒険旅行を目的とするいわばプロの旅行家にとって、日光は旅行のほんの入り口にすぎない。重要なのは、その先奥深く、外国人がほとんど足を踏み入れていない秘境、すなわち「未踏の地」(*unbeaten tracks*)⁽¹⁹⁾であった。そこでバードは日光までの道のりを、せめて「普通のコースを避ける」⁽²⁰⁾ことによって、旅行家としての意地を示した。それは馬車利用の奥州街道ではなく、江戸時代に宮中の使者が通った例幣使街道であった。

人力車で二泊三日揺られた後、バードは日光入りする。そびえ立つ男体山、大谷川の奔流、急な勾配の民家の屋根、…そのような景色にスイスを思い出していたところ、神橋で出迎えてくれたのは、「金谷さん」であった。この「金谷さん」はバードによれば、村長で雅楽の家だが、「やる仕事がほとんどないので、自分の家と庭園を絶えず美しくするのが主な仕事となっている。」⁽²¹⁾この美しい家と庭園こそ、現在の金谷ホテルの由来である。バードによれば、「近頃かれは、収入を補うために、これらの美しい部屋を紹介持参の外国人に貸」⁽²¹⁾すことを始めた。

この金谷さんの家に、バードは十日ほど滞在する。その間、当主をはじめ、その妹で日本で会った女性で二番目に優美なハルさん、そして利発な子供たちと交流し、「日本の中流家庭の家庭生活を少なくとも外面から見て、」⁽²¹⁾また、村の生活も女性らしく細やかに観察して、「この土地が全く好きになる。」⁽²²⁾

東照宮についていえば、バードは称賛を惜しまない。社殿の美しさに感動するだけでなく、技術力に感心する。すなわち、「木、青銅、漆のすばらしい細工に深い感銘を受け、それに劣らず石造建築にも感嘆した。」⁽²³⁾「石垣、石廊、階段や手摺が、セメントや漆喰も使わずに組み立てられ、ぴったりと接着しているので、二百六十年間も雨や湿気、草木がはびこっても、その継ぎ目はびくともしない」⁽²³⁾と、驚く。

同時に、その美しさが自分たち西洋とは違うものであることを指摘する。「西洋美術のあらゆる規則を度外視した」⁽²⁴⁾美しさであると。そしてその「美しさの虜」⁽²⁴⁾となる。つまり、バードは、自分たちの規則と違うことを理由に、東照宮を拒否することはしない。自分たち流でないからと言って無視せずに、むしろそれ故に、「虜」となり惹きつけられている。「今まで知られていない形態と色彩の配合の美しさを認めないわけにはいかない。」⁽²⁴⁾と、あっさり脱帽する。

家康を祀ることについては、賛成も皮肉も反対もない。「勅命によって神として祀られ、東照大権現の名を賜った」⁽²⁵⁾と事実を記すだけである。むしろ、家康の墓のところでは、少々情緒的になっている。背後に山が迫って杉の大木が影を落とすので、「昼なお薄暗く、(…)花も咲かず、鳥も鳴かず、日本で最も偉大で有能であった人物の墓のまわりには、ただ静けさと悲しみが漂っている」⁽²³⁾と、バードにしては珍しく、感傷的な文章を残した。

こうして、「日光に九日滞在したから、『結構』という言葉を使う資格の出来た」⁽²⁶⁾バードは、日光までの「安楽な生活」⁽²⁷⁾に別れを告げ、いよいよ「未踏の地」へと、分け入っていく。蚤や蚊の攻撃、プライバシーの侵害、落馬とのたたかいは、日光を発ってから、本格的に始まった。

ところで、バードが日光をほんの入り口として果敢にも奥地旅行を遂行した、明治十一年といえば、明治三年に外国人としてパークス夫妻が初めて日光に投宿を許されてから、わずかに八年しか経っていない。しかし、意欲満々の訪問者にとって、もはや日光は、冒険の先ではなかった。すでに「西洋人がよく出かけ」⁽²⁸⁾「安楽な生活」⁽²⁷⁾ができる、行きやすい訪問先であった。

これだけの評判と条件が整って来ると、日光は、外国から国賓級の客人を迎えることも出来る土地となった。すなわち、翌十二年(1879)、グラント元米国大統領夫妻一行の来駕を仰ぐ。

この国賓の来日には、折りからの条約改正を意図する明治政府の意向もあって、朝野を挙げての歓迎が用意された。二ヶ月間にわたる東京滞在中は公式行事が続いたが、そのうちの十日間の日光旅行は、一行の政治的日程の中の、いわゆる気晴らしの休日となった。現在でも、外国からの訪問客がトウキョウでの公式行事やビジネスを終えた後、日光や箱根に気晴らしに出かけるが、その先鞭ともいえる、グラント元大統領の日光訪問であった。

(五) フランスの作家ピエール・ロチ(明治十八年の来日)

賑々しい米国元大統領の日光訪問から六年経った、明治十八年(1885)の十一月のよく晴れた数日間、フランス海軍、トリオンファント号の艦長が一人静かに日光を訪れた。この海軍大尉は七月八日に長崎に入港、『お菊さん』の素材の体験をしたのち、十月から晩秋にかけて、京都、東京とその周辺を巡り歩いた。かれ好みの晩秋の見聞記を帰国後にまとめ、『秋の日本』(*Japonerie d'Automne*, Paris, 1889)として上梓した。そのうち一章は「日光霊山」という題のもと、日光訪問に捧げられた。

この艦長こそ、来日時、すでに母国で一流の作家となり莫大な印税を手にしていて、ピエール・ロチ(Pierre Loti, 1850-1923)である。

日光訪問は、冒頭に例の諺を引用していることから判るように、当然のこととして「日本のメッカ」⁽²⁹⁾を訪ねたのであった。日本滞在日数もすでに四ヶ月を経ており、ロチは極東の国の風習にも慣れ、この国の美醜に対する好みも批判も固定化してきていた。しかし、この作家の特有の筆さばきは相変わらず興味深い。

たとえば日光へ向かう道中の活写である。この小論の関心から読むと、ロチを迎える側の人々、すなわち宇都宮や日光の旅館の人々や人力車の車夫たちが、ガイジン観光客に対して、以前よりはるかに応対が慣れてきたのがよくわかる。つまり、ロチと互いに駆け引きをしたり、あるいはガイジン客に慣れて緊張感を失ったりする場面が出てくる。日暮れを迎え一泊したがる車夫たちと、それを脅したりなだめすかししたりするロチ。旅館に着くとすぐに設定される宿賃。深夜の客を給仕しながらつい居眠りをして船を漕ぎ、爆笑をかった女中など…。テンポの早い劇を見るように、ガイジンを取り巻く周囲の様子が、ロチの筆によって活写されている。

またロチは音の描写にこだわる。つまり、よく言葉の通じない分、彼の聴覚はより敏感になり、録音再生するかのごとく記述していく。それは、女中たちの声から、雨戸の開閉音、森の季節はずれの蟬時雨、滝や奔流の轟音、読経と朗誦、木魚の響きまで…ありとあらゆる音が含まれる。しかしどの音も、ロチにとって、決して心地よい音ではない。ロチの「耳を聳する」⁽³⁰⁾音であった。

もちろん、霊山を参拝する際の文章は、美しく絵画的である。東照宮や自然の色彩と形を精緻に再現する。家康と家光の霊廟を「圧倒的に美しい」⁽³¹⁾という。また後に、『お菊さん』の和訳の許可を求められたとき、ロチは、特別に訳者に序文を寄せた。そして、『秋の日本』は日本の美術工芸への感嘆と尊敬の念を込めて書いたものである、と述べる。⁽³²⁾これは当然、東照宮を念頭に置いた発言と考えられる。

しかし、ロチの本音を訊ねると、ほかでの日本観察のときと同様、冷淡に距離を置いて、日光を通り過ぎる。「日本のメッカ」を、「理解できないもの」⁽³³⁾「奇抜なもの」⁽³⁴⁾として拒否する。たとえロチが、日本の訳者、ひいては読者に向けて東照宮の美術工芸を認める発言をしたとしても、ここの「夥しい金や漆喰や労作物」⁽³¹⁾を見てまわるのは、彼にとって「疲労の種」⁽³¹⁾であり、実際、「くさくさしてしまう」⁽³¹⁾のであった。

それだけではない。このフランス人にとって、このような美術工芸が異様に思えるばかりか、それを作った日本人まで地球人でない異星人に見えてくる。ロチは、東照宮を「日本の芸術の精髓」⁽³⁵⁾とするのだが、その精髓は、「ギリシャ、ラテン、アラビアなどの我が西欧の古美術からはなんら血も引いておらず、(…) 私たちには異様」⁽³⁵⁾でしかない。「私たちの地球とは何の交渉もない、何か近くの遊星からでもやって来たよう

だ」⁽³⁶⁾という。つまり、ギリシャ、ラテン、アラビアなどの人々だけが地球人で、日本人は、「私たちの地球とは」何の交渉すらない異星に住む生物となる。文明の起源が全く違う民族だから、分け隔てる「深淵」⁽³⁷⁾は、ロチにとって、それほど深い。かれは、「国と国の間の極端な隔たり」⁽³⁷⁾を痛感する。

ここでロチの見方を批判しても仕方がない。この文章をはじめ、ロチは、フランスの読者が喜ぶように、ニッポンの印象を率直に語っただけなのであるから。自分だけが正常であるとして、自分だけをすべての判断の基準にする西洋人は、何もロチに限らないのだから。しかもロチは、後の小説、『お梅さんの三度目の春』で、「自分が愛することもなく悩みもしなかった国からは、心に残るものは何もない」と述べるほど、日本に対して、あっさりしたものなのだから。

ただ指摘しておきたいのは、相手の側から見れば、自分も「奇抜」で「異様な」異星人になりうることに、ロチは気づいていなかったことである。先ほど扱ったギメは、自分が日本では、「不信心者」であり、「未開人」として神聖な場所に侵入したという感覚を持っていた。しかしロチは、自分の視点を相手側に移動させ、反対側から見ることは、決してなかった。複眼をもつという発想がなかった。また、「耳を聳する」音に囲まれて、その音に耳を傾けることもなかった。一言で言えば、相対的な見方ができなかった。

ところで、このフランスの三十五歳の士官は、日光からの帰途、横浜近くの茶屋で十七歳の素朴で健康的なムスメに接する。そして彼女の魅力の方にすっかり心惹かれた。すると、霊山の夢は一気に光彩を失い、「退屈で空虚で生気のない」⁽³⁸⁾ものになってしまった。それがロチの霊山訪問の顛末であった。

以上、明治九年から十八年までの、欧米からの訪問者の記述を拾った。日光への旅行手段が年を追って確立していったことが、ガイジン利用者の生の声から浮かび上がった。また、東照宮を訪れた欧米人は、共通して、まず驚き、次に自分と違うことに気づくのであった。しかしそのあと、自分と違うゆえにその「美の虜」になったり、あるいは、「他の遊星人」の異様な仕業といって拒否したり、と、好悪の感情に分かれたことが、明らかになった。言い換えれば、違う文化を認められる者と、認められない者に分かれたことが、発見できた。

ここで次に、明治十九年(1886)来日のアメリカからの二人の訪問者の感想を、約五十年後来日したブルーノ・タウトの日光東照宮ならびに桂離宮への批評と照らし合わせて、アメリカ人らしさと東照宮の呼応関係を考えたい。

第二章 アメリカ東部エリートたちの東照宮

(一)ヘンリー・アダムズとジョン・ラファージの来日の経緯と日光への避難

明治十九年(1886)の夏、アダムズは日本旅行の計画を実行に移し、十数年来の友人のラファージを誘った。なぜ二人は日本を訪れることにしたのだろうか。

ヘンリー・ブルックス・アダムズ(Henry Brooks Adams, 1838-1918)は、大統領を二代輩出した、ボストン社会でも名門中の名門の出身の思想家である。前年の明治十八年十二月六日の昼、妻が自室で自殺したことをきっかけに、日本旅行の実現を決意した。その理由は幾つかある。まず、背景として当時の米国、ことにニューイングランドにおいて日本美術と仏教への関心が高まっていたことである。これには、第一章で扱ったモースが帰国後日本紹介の連続講演会をボストンで行い熱弁を振るったことも、大いに貢献している。次に、アダムズの個人的な人脈という「つて」を得ることができたからである。すなわち、駐米公使吉田清成や後任の九鬼隆一、さらに妻のいところで、すでに在日中のビゲローらを頼れたのは、旅行者にとって心強い。そして、直截的な理由は、妻の自殺による衝撃を旅によって和らげたかったからである。「秋に帰国する頃には、多分、世事にもう一度関われるよう、精神状態を回復させている(明治十九年四月二五日付の手紙)」⁽³⁹⁾と願う。

そのアダムズが同道者として日本旅行に招待したのは、画家ジョン・ラファージ(John La Farge, 1835-1910)

である。この性格の穏やかなフランス系の友人は、ニューボートで画家として始動するだけでなく、日本美術研究家、収集家として合衆国の先駆者の一人であった。父の死後は生活も逼迫して、油彩に限らず、教会や邸宅の壁画、ステンドグラスなどの装飾の仕事に携わり、まさに鍍金時代の要請ともいえる仕事をこなしていた。

二人の滞日中の感想は、アダムズに関しては、母国の友人たちに書き送った歯に衣着せぬ書簡から、ラファージュに関しては、帰国後にまとめた『一画家の日本便り』*An Artist's Letters from Japan* (New York, 1897)から、読み取ることができる。

二人は、日本到着の七月二日から一週間、横浜グランドホテルに逗留して、ビゲローの付き切りの案内と、その友人で東京帝国大学の外人教師であったフェノロサのアドバイスを得ながら、東京見物に明け暮れ、横浜―新橋間を鉄道で何度も往復した。しかし、トウキョウの暑さは身にこたえた。ことにワシントンで下水道付きの最上の生活を送っていたアダムズにとって、どぶの水の溢れる不衛生さとその臭いは、堪らなかった。母国の友人に、「面白いよ、確かに。想像を超えてね。だが快適だとか、楽だとかいうのはちっともない。」⁽⁴⁰⁾ (同年、七月九日付) と、書き送って、音をあげている。

その上、明治十九年の東京の夏は、猛暑だけではなく、コレラの大流行という事態に見舞われる。そこで、フェノロサとビゲローに勧められて、アダムズとラファージュは、日光に逃げ込むことになる。というのは、フェノロサが、自分たち家族が逗留する屋敷の隣の家を、借りれるように手配してくれたからである。

一行は、前年に開通したばかりの上野―宇都宮間の鉄道を利用して、四時間汽車に揺られ、宇都宮で日本式の旅館に一泊し、七月十二日、人力車で日光へ入った。

ところで、数年前、筆者が輪王寺を訪ねて調査したところ、この借家は、禅智院という輪王寺の由緒ある塔頭の所有であることがわかり、当時は、鈴木静海和尚が住職であったことも判明した⁽⁴¹⁾。借家は二階家で、二階の八畳二間に、それぞれが一間ずつ、旅装を解いた。日光霊山に抱かれる一ヶ月が始まった。

(二) アダムズと東照宮

まず訪れたのが、東照宮である。

アダムズはもともと、その手紙のなかで、寺社について言及することは非常に少ない。東京の増上寺については、二、三行、記しただけだし、後に訪れる京都や奈良の寺社へのコメントは皆無である。実際、ラファージュによれば、帰路、琵琶湖畔で寺にまわろうか、どうしようかという相談のとき、アダムズの反対により、取りやめにしたほどである。つまりアダムズの寺社への関心は、低い。

しかしそのアダムズも、東照宮については新鮮な驚きを覚え、ジョン・ヘイを始め友人宛てに、例外的といえる十数行の分量の感想をしたためた。

では何が印象的だったかのというと、東照宮の規模の大きさである。建物の内外に繰り返される彫刻に対しても、金銀、そして青、赤、緑の極彩色の装飾に対しても、関心は薄い。むしろそうした巧緻極まる作りは、「安っぽくて、グロテスクである」⁽⁴²⁾として、または「おもちゃの寺みたいだ」⁽⁴³⁾として、退けられる。アダムズが目にしたのは、スケールの大きさ、すなわち山を切り開いた造営の大きさである。

ここで東照宮の立地と造営規模、また費用について、一言付しておきたい。東照宮造営にあたっての位置の選定は、家康の遺言によってなされた。すなわち、日光は元来、古代の神々(二荒山神社など)と山岳信仰(密教の輪王寺)の霊山であるので、関東八州の鎮主の意味も含めて最適地であるとして、家康が決定したのである。そして敷地計画の「縄張り」は、戦国時代の城郭建設計画で腕を振った人々が行い、大きな山稜を背にし、南が緩やかに開けた良好な地形を選んだ。日光の土地の伝承では、東照宮造営のとき、背後の山上にある奥社の金箔の輝きが、はるか宇都宮の町から眺められたという。そうした山上から関東平野を見下ろす立地に、寛永の最終完成時には、本社、唐門、回廊などの約三十棟の建設と、巨大な石垣、奥の院の参道などの土木工事が施された。この大規模造営の理由は、徳川の威信を示すためということのほか、豊国神社と同じく、広い参道と広場を有することにより当時の民俗風習である「祭り」の伝統を取り入れたこと

もあり、ともかく、大きな神社になった。しかも建設工事は、元和の造営と言われる第一回目と、一層大規模でほとんど作り替えといえる家光による寛永の造替の、二回にわたって行われた。当然、費用は莫大で、金五十六万八千両にのぼった。家康は、幕府の軍資金として百二十万両貯えたといわれるが、その半分にのぼる出費であった。そして、指名された工事請け負い人の匠たちは、期待にこたえるべく、造営に思う存分エネルギーを注ぎ込んだ。その結果、イギリスの旅行家バードも感心した、二百六十年経ってもびくともしない石造建築が出来上がった。こうした大規模な工事に関する、アダムズの感想を聞こう。

写真好きのアダムズは、友人に幾葉かを同封して、もどかしそうに語る。「写真ではそのスケールの大きさを全く表せられない」⁽⁴²⁾と。確かに写真は、「この一つの寺を、あそこの一つの門を見せてくれる。」⁽⁴²⁾しかし、「二十エーカーの広さの土地、それもたった一つの構築体を作るために独創的に使われている土地は、写真では示せない。高さ百フィートの常緑の木々で覆われた山の側面が、死後、神として奉られた人の住居に作り変えられたことは、写真では示せない」⁽⁴²⁾と。東照宮の規模がファインダーからは到底覗ききれないことを述べる。

そしてこの造営が、霊山全体で一つの構築体になっていることにも注意を向ける。「寺院の総合的な成果、つまり、墓、建物、装飾、風景、木々の葉から成る結果は、たいそう効果的である。」⁽⁴²⁾と、寺院を好まないアダムズにしては、最大級の言葉を尽くしている。すなわち、石鳥居に始まり、陽明門、本殿、奥社の家康の墓までの全てが、山の風景の中に、樹木の常緑の葉陰までも含めて、ただ一つの総合的な建築体としての結果を生むように作られたことを、認識している。日本の寺院は西洋と違って、建物一つで完結する単一体ではないことを、認識している。この認識はラファージの文章にも見られるので、二人の会話に出ていたのであろう。

こうして、自然界の山腹が大胆にも、一つの建築総合体に作り変えられたことを目の当たりにして、息を呑み驚きを覚えるアダムズであった。驚き、つまり意外性をアダムズは感じた。「日本人にできる仕事として今まで考えていたのよりも」⁽⁴²⁾東照宮は、ずっと「大きい」⁽⁴²⁾と認めた。「マッチ箱のような」「人形の家に住む」⁽⁴³⁾子供の日本人、あるいは、骨董でも小さなものばかりの日本文化。そんな微小性、貧弱さしか感じられなかった日本で、初めて大胆豪快な仕業を見つけたのである。

その結果、アダムズは東照宮を形容するために、日本を離れて、ピラミッドやヴェルサイユ宮殿を引き合いに出す。彼の建築と歴史の知識をもって観察すると、将軍が山を切り開いて造った大墓所は、「千四百万ドル」⁽⁴²⁾に相当し、「ルイ十四世やヴェルサイユは日光に比べればたいしたショーではない」⁽⁴²⁾ということになる。そして「漆とグリースの一種のエジプトである」⁽⁴²⁾という。為政者の宮殿、あるいは墓所という共通項のある譬えに、手紙を受け取った友人はきっとイメージを膨らませながら東照宮のスケールの大きさを想像したことであろう。

さて、東照宮という大きな仕業に驚いたアダムズは、帰国後、亡き妻のメモリアル・モニュメントを建造することを決意して、友人の彫刻家セント・ゴーデンスに依頼した。これは、死後の住居としての東照宮を目の当たりにしたことと無縁ではあるまい。ゴーデンスはラファージと相談して、白い布を頭からかぶる女性像を完成させた。ちなみに、ワシントンDCのロック・クリーク・パークのこのモニュメントのもとに、今もアダムズ夫妻は永遠の眠りにについている。

(三) ラファージと東照宮

ラファージは『一画家の日本便り』のうち、二章を霊廟に捧げる。⁽⁴⁴⁾まず徳川幕府の成立経緯を説明する。殉教の史実にも触れ、実際に自分が家康の墓に行ったときには、「忌むべき外国人がいま観光の好奇心からその墓の手摺にもたれかかっている」⁽⁴⁵⁾と述べて、カトリック教徒の血が流れる人間の立場から、歴史の皮肉を痛感した。

次に、東照宮の構築体を順に描写する。杉並木から奥の院まで、それぞれの色、形、材質を説明する。その装飾については、「鍍金、漆、彫刻、銅など、人間の芸術のうちで最も精巧で、繊細で、念入りに作られた」⁽⁴⁶⁾

ものであると評価する。もっとも見学の終わりには、「きりのない細部を見る楽しみに疲れ」⁽⁴⁷⁾ていたが。ラファージ自ら、教会や邸宅の装飾に携わっているのも、同じ仕事仲間として、日光の職人芸の巧緻に一目置くのも当然であった。

しかしこの熱心な見学者はその職業が装飾芸術家であったとしても、個々の細部を見ることで甘んじることはない。視野をぐっと広げて、全体像をつかむ。アダムズと同じく、この建築が広々とした自然空間の中の総合体であることを指摘する。

しかもここから更なるラファージの視点を感じるのは、この芸術家が、自然と東照宮を対峙させて、永遠なる自然に対して人間の営みがはかないことを意識するところである。

先にも述べたように、東照宮は丘陵を開いての莫大な造営によって作られた建築である。そのスケールの大きさに、アダムズは驚き、歴史家の眼で造営費の計算まで試みた。自然をいわば征服した人間の仕業を認めた。それに対しラファージは、芸術家の眼で自然と謙虚に向かい合って思索した。すなわち、人間が技術の粋を集めて作った極度の豪華を、静寂な自然の単純さと対照させる。しかも、「技術の素晴らしさがこの上ない」⁽⁴⁸⁾から、また「洗練と文明を誇張して山ほどに積み上げている」⁽⁴⁹⁾から、だから一層、人工と自然との「対照」⁽⁴⁶⁾は度合いを増すと考える。そうすると、人工は自然の前に、あまりにも空しいと、この芸術家は感じた。「鍍金の社殿は不滅の丘と木立に隠れつつ」⁽⁴⁶⁾天空に向かって身をさらしているにすぎないことを発見する。「死と生々流転、人間のはかなさをこれほど如実に思い知らされるものはないだろう。」⁽⁴⁶⁾と結論づける。芸術家として、人工の仕事が優れていれば優れているほど、自然にはかなわないことを目の当たりにした。

ところでこの見方は、自然を威嚇し治めた人間の力を認めたアダムズとも、また自然を背景にするからこそ東照宮は美しいと感じたこれまでの訪問客、たとえば「金色の大海と緑の岬」を称えたギメとも、違っている。ラファージのは、自然と建造物を対比させ、人間の力よりも自然に優位を置いた見方である。これはまさに、自然を崇敬する日本の宗教観と共通する。

実はラファージは、霊山日光に一月逗留しながら、仏教徒に改宗したばかりのフェノロサとビゲローから日本の宗教について話を聞いていた。ことに、二荒山神社の古代の神々・輪王寺の仏教・徳川霊廟・滝や岩を祭る民間信仰というように、幾重にも宗教が重なった状況を地元日光でつぶさに見て、彼ら友人の説明に共感を覚えることもしばしばあった。もともと神秘主義的な思考もあった芸術家なので、それほど抵抗なく彼らの意見に耳を傾けた。この小論で検討する余地はないが、『一画家の日本便り』には、仏教や老荘思想についての章もある。したがって、「人間のはかなさ」を「自然の永遠性」のなかに痛感する、ラファージの考え方は、ごく自然に生じたといえる。

(四) ブルーノ・タウトと比べて

最後に、この二人のアメリカ人の東照宮評価を、ブルーノ・タウトのいわば伝説的な発言と比べて、そこにアメリカ人の特性を見い出したい。

タウト(Bruno Taut, 1880-1938)はアダムズたちの訪日から約半世紀後の昭和八年(1933)五月三日に、シベリア経由で敦賀に上陸した。翌日の折しも誕生日に桂離宮を訪問して、「泣きたくなるほど美しい」と、あるいは、「心を和ます親しさ」「眼を悦ばす美しさ」⁽⁴⁸⁾と日記に記した。一方、ほどなく訪れた東照宮については、同じ日記に「威厭的で少しも親しみがない」と、あるいは、「珍奇な骨董品」「建築の墮落」⁽⁴⁹⁾(同年五月二日)と記した。この二つの対照的な記述と滞日中の著作が、迎える側の日本の様々な思惑とあいまって、桂離宮の発見と東照宮の否定という日本の代表的古典建築への評価の一変を生じさせたと、これまで伝説的に言われてきた。近年、タウトの発言を再検証しようという動きもあるが、タウトの言葉じりをとらえて、桂と日光を対比して簡単に優劣をつける傾向が、いまだにあるのも事実である⁽⁵⁰⁾。故にこの小節では、いわゆるタウト流の尺度から見れば審美眼の欠如と片づけられかねない、アダムズとラファージの東照宮支持が、意外にも、彼らなりのアメリカ人らしさを呈していることを指摘して、巷間にあるタウトの呪縛から解き放たれた東照宮の姿を求めたい。

そもそも、東照宮と桂離宮の両建築は共通点も多い。まず、十七世紀初期のほぼ同時期に造営されている。次に、どちらも空間的な広がりの中に、いろいろな目的の建築が組み合わされて、一つの総合的な世界が作り上げられている。さらに両建築とも各々の細部では、小さな意匠が凝らされ強烈なエネルギーが凝集されている。匠たちにも共通する人物がいて、たとえば狩野探幽、尚信や、大棟梁甲良豊後や、家光の側近の武将の小堀遠州らは双方の造営に携わった。その上、陽明門にかけられている「東照大権現」の額と桂の松琴亭にかけられている「松琴」の額は、どちらも後陽成院の筆と伝えられる。

もちろん相違点もある。一方は將軍家の霊廟であり、一方は親王家の別荘という目的の違いがある。そして関東の僻地の山と京都桂川のほとりという、立地の違いもある。しかし二つの建築が多くの共通点があるにもかかわらず大層違った印象を与えるのは、桂離宮が斜陽の宮廷の優雅さを重んじたのに対し、霊廟は、徳川勃興期の政治的意図と新興江戸の活力発散という、いわば日昇る勢いを表現しているからである。桂離宮には、日本的な優雅さを持続させようとする教養人としての伝統が脈打っているし、東照宮には新しい環境で建築の技術力を開発する工匠の果敢な挑戦が感じられる。同じ時代に、この二つの対照的な建築が造られ、しかもそれぞれエネルギーに満ちた表現を生み出し得たのは、京都から江戸へと時代の覇者が大きく転換するときであったからではないだろうか。京文化の粋を凝縮した桂離宮は、消え入る前に最後の輝きを放つろうそくの灯火のようである。一方、労力資力をつぎ込んで技術的工夫を重ねた徳川家の建築は、新しい時代を治めるために薪と酸素をふんだんにくべられ燃え盛る^{かまど}竈のようである。

その竈へ足を踏み入れたのが、新興国アメリカからの客人であった。この二人は、教養もあり分別をわきまえた東部のエスタブリッシュメントである。日々の糧を得るために爪に灯をともして生活する移民の世代はもう卒業した、ゆとりのある世代である。とはいっても、何事も、つまり制度も都市も建物も芸術もすべて、自分たちの手で作り上げていく世代であることには変わらない。アダムズは幼い頃、曾祖父と祖父が大統領として国を治めたのを言い聞かされて育ったし、青年時代はイギリス大使の父が南北戦争中に対ヨーロッパ交渉をするのを見聞したし、実の兄は現在、大陸横断鉄道会社を経営しており、アダムズ自ら屋敷を構えるワシントンは最近まで工事に継ぐ工事で首都としての体裁をまさに整えたところであった。ラファージはといえば、フランス遊学の後に帰米して画家として身を立てると同時に、本の挿し絵も教会の壁画も描き、邸宅の窓を飾ることも、技術者として建築現場に立ち会うことも、何でも携わっていた。折しも、この日本旅行の時点では、ニューヨークの昇天教会の壁画を依頼されていた。

つまり、この二人の客人は、母国アメリカでは、ヨーロッパ文明を背景に知識として見据えながらも、自らの手でアメリカをリードしていく指導者の立場であった。京都と江戸の対比に照らせば、ヨーロッパという「京文化」から独立してアメリカという「江戸文化」を興す立場にあった。だからこそこの二人は、新興徳川のエネルギー溢れる日光の建築のなかに、新しい環境に挑むフロンティア精神と精力に満ちた工匠の仕事とを、直感しえたのである。まして、この旅行で妻の自殺の痛手から立ち直り人生を再建しようと密かに願っていたアダムズにしてみれば、徳川のスケールの大きさと人間の力に共感を抱けたであろう。鍍金時代の芸術企業家として活躍を囑望されているラファージにしてみても、人工のはかなさを痛感しつつも、日本の先人の功績をみてこれからの仕事への励ましとしたであろう。それぞれの観点は違っても、二人は、日昇る勢いを表現する日光の試みが理解できたのである。

それに対し、昇る日の勢いよりも斜陽の輝きを美しいと感じたのが、タウトであった。よく知られるように、母国ドイツであれば活躍した円熟期の著名な建築家は、故国を去らざるをえなかった、いわば亡命者として、「閑」を味わう日々を求めて、シベリア経由で日本にたどり着いた。こうした状況下のタウトが、宮廷貴族の別荘、すなわち「閑」を楽しむ離宮を、日本の地を踏んだ翌日に訪ねて、「泣きたくなるほど美しい」と直感的に記したのは、ごく自然であった。そして、古典建築の観察と執筆のほかにはほとんど仕事をせずに静かな日々を過ごす思索家は、自己を主張して止まない徳川の表現形式を「いかもの（キッチュ）」と呼んで、「威嚇的で親しみがなく、(…)眼はもう考えることはできない」⁽⁴⁹⁾と退けたのであった。色彩建築を実践したかつての表現主義作家も、五十三歳のこの時の心持ちでは、東照宮の色彩乱舞の前に、眼を閉じるばか

りであった。もっとも、高橋英夫氏がで指摘しておられるように⁽⁶¹⁾、「キッチュ」という判断を下したことは、色彩や素材での冒険を試みたことのあるドイツの建築家の深層意識では、日光にそれなりに価値を付与していた。つまりタウトは、桂の「簡明直截」な機能美の対局に、日光の低俗な「珍奇な骨董品」を据えて、日本の建築の二つの流れを発見した。その二つの流れとは同時に、一方では、桂のように自然と対立しない、建築らしからぬ建築であり、他方では、日光のように自己を主張し周囲の自然とは隔絶する、建築らしい建築である。タウトのキッチュという概念の贈り物によって、東照宮の「建築の孤立」は、正当に評価された。

そして先のアメリカのエリートたちと重ねて考えてみれば、二人が徳川の新興の息吹きを感じえた力量は、隠遁者のタウトの美意識には、欠けていた。あるいはキッチュという価値を与えるのが精一杯であった。新興江戸の日昇る勢いを許容できるか退けるか、両者の来日の背景も無縁ではない。アダムズとラファージが、東照宮に新興の大胆な力量とその空しさをも共感を持って認識したところに、彼らのアメリカ人らしきが見てとれるし、一方、タウトが桂離宮を簡素で清閑の故をもって称賛し心洗われる気分になりたかったところに、休業中の建築家の胸のうかが窺い知れる。残念なのは、もしも新興国の客人が桂離宮を訪れたとしたら、どのような感想を持ったか聞けないことである。

また、アメリカの二人に少々花を持たせてあげるとしたら、彼らも東照宮の「建築の孤立」は見抜いていたことを指摘したい。なぜなら、東照宮を、アダムズは自然を征服した建築体とみなしていたし、ラファージは自然のなかの空しい建築体と感じた。つまり、威圧的で孤独な東照宮を認識していた。彼らの指摘は、専門家のタウトに比べれば感想の域を越えないが、タウトに先立つこと五十年のことであった。

おわりに

明治時代初期から、外国人は内地旅行免状を取得して盛んに旅行を試みた。到着港の横浜から行きやすいのはまず東京であり、箱根も早い時期から外人客を迎えていた。そしてこの小論で明らかになったように、日光も注目の地であった。

交通手段は、始めは人力車を連ねて、次に馬車の便を利用して、さらに宇都宮まで汽車に乗って…と、だんだんと便利になる。一行の人数も、当初は「念には念を入れ」領事館の外交官の随行を求めたり、西洋料理のできるコックを同道したり、と大掛かりだが、次第に通訳一人を連れぐるの身軽さで、あるいは知り合いに案内されて、といった具合に、個人のベースで準備して、出かけていった。迎える日本側も、外人を敬遠していたのが、駆け引きをしたり、積極的に貸し家を提供したり…と、熱心に迎えるようになっていった。

そのようにして日光を訪れた外国人に共通していえるのは、東照宮という宗教建築を見学して、まず驚くことである。しかし次に彼らが「結構」と言ってみるときには、それなりにニュアンスが違うことも浮かび出てきた。同じ対象を前にしても、その人個人で感想が違うのである。

そもそも、キリスト教信者にとって、人を神と祀るのは教義に反するのだが、それを事実として淡々と認める者と、違和感を持つ者とがいる。また、工芸の粋を尽くした建築物そのものに、西洋と異なることを実感した後、違うから却って「虜」となる者と、違うからあまりにも深淵が「深い」といって拒否する者とがあった。日光という旅先で宗教建築を前にして、その印象が好悪に分かれるのは避けられないし、自分と違うものを理解できなくても無理のないことである。

しかし、自分と違うことに気づいて驚いたときに、その違いを認めるか、あるいは、違うからと言って相手を否定するかでは、そこに、個人の物の考え方の力量の差が存在するのではないだろうか。その力量の差とは、言い換えれば、驚愕のうちに他者を認め、同時に、自己を振り返って新たな自己を見つけることができるかどうか、である。そのような自己発見という意識改革の醍醐味を味わえるかどうか、である。

見知らぬ対象は、初めて接する人に、この課題を問うている。日光の東照宮は、外国からの客人に、旅という空間的な移動、および歴史という時間的な移動を同時に体験させながら、その人の驚愕のうちの自己発

見という意識改革を促している。つまり、東照宮は、その人の異文化理解の度量の広さを顕現させている。

欧米人が何気なくつぶやいた「結構」という言葉の表現の仕方に、私たちは、彼らの度量を知ることができたのであった。

注

- (1) 横浜開港資料館編『世界漫遊家たちのニッポン』（横浜開港資料普及協会、1996年）27頁。
- (2) 青木啓輔訳、エミール・ギメ、『東京日光散策』（雄松堂出版、昭和58年）127頁。（以下、ギメと略す）
- (3) ギメ、151頁。
- (4) ギメ、153頁。
- (5) ギメ、152頁。
- (6) ギメ、154頁。
- (7) ギメ、165頁。
- (8) ギメ、156頁。
- (9) ギメ、149頁。
- (10) 石川欣一訳、エドワード・モース、『日本、その日その日 1』（平凡社、東洋文庫、1989年）41頁。（以下、モースと略す）
- (11) 篠原宏『明治の郵便・鉄道馬車』（雄松堂出版、1987年）87—88頁。
- (12) モース、57頁。
- (13) モース、62頁。
- (14) モース、64頁。
- (15) モース、68頁。
- (16) モース、67頁。
- (17) モース、66頁。
- (18) モース、40頁。
- (19) Isabella L. Bird, *Unbeaten Tracks in Japan* (Vermont & Tokyo, Charles Tuttle Company, 1990) p.79. (以下、Bird と略す)
- (20) Bird, p.47.
- (21) Bird, p.53.
- (22) Bird, p.66.
- (23) Bird, p.58.
- (24) Bird, p.60.
- (25) Bird, p.55.
- (26) Bird, p.54.
- (27) Bird, p.80.
- (28) Bird, p.xxiv.
- (29) Pierre Loti, "La Sainte montagne de Nikko," *Japoneries d'automne*, (Paris, Calmann-Levy, 1921) p. 154. (以下、Lotiと略す。)
- (30) Loti, p.199.
- (31) Loti, p.228.
- (32) 河盛好蔵『フランス文壇史』（文芸春秋新社、1961年）184頁。
- (33) Loti, p.197.
- (34) Loti, p.206.

- (35) Loti, p.221.
- (36) Loti, p.222.
- (37) Loti, p.243.
- (38) Loti, p.256.
- (39) ヘンリー・アダムズよりガスケル宛て書簡、1886年4月25日付。
The Letters of Henry Adams, vol.III. ed. by Ernest Samuels (Harvard University Press, 1982) p.8.
(以下、Adamsと略す。)
- (40) ジョン・ヘイ宛て、1886年7月9日付。Adams p.14.
- (41) アダムズとラファージの滞在が判明した禅智院は、1278年鎌倉中期の建立である。筆者は、第三十二世の貴船光昭御住職に貴重なお話をお伺いすることができ、お二階家とお庭も拝見させていただいた。心からの感謝の気持ちを改めて表したい。
- (42) ジョン・ヘイ宛て、1886年7月24日付。Adams p.24.
- (43) ドワイト宛て、1886年7月17日。Adams p.18.
- (44) John La Farge, "The Shrines of Iyeyasu and Iyemitsu in the Holy Mountains of Nikko," *An Artist's Letters from Japan*, (New York, Century, 1897), (以下、LaFargeと略す) pp.52-84. "Iyemitsu" LaFarge p.85-98.
- (45) LaFarge, p.83.
- (46) LaFarge, p.74.
- (47) LaFarge, p.81.
- (48) 篠田英雄訳『日本 タウトの日記 1933』(岩波書店、1975年)40—42頁。
- (49) 同上。88—89頁。
- (50) 井上章一『つくられた桂離宮神話』(講談社、学術文庫、1997年)に詳しい。
- (51) 高橋英夫『ブルーノ・タウト』(新潮社、1991年)